

ブリ *Seriola quinqueradiata*

成長に応じて名前が変わる出世魚です。高知県内では、幼魚をモジャコ、以後成長にともない、ツバスあるいはヤズ、ハマチ、メジロ、ブリと呼ぶのが一般的です。メジロは体重 4~5kg 級を指すことが多く、おおむね体重 6kg から 7kg をこえるとブリと呼ばれるようになります。しかし、県内でも地域によってこの区分は異なります。典型的な食用魚で、特に冬季に来遊する脂の乗った大型魚は寒ブリとして珍重されます。刺身や照り焼き、しゃぶしゃぶなどにするほか、アラもブリ大根として利用されます。

生物特性

稚魚は流れ藻に着き、モジャコと呼ばれます。太平洋側では、0歳で尾叉長 43cm、体重 1.09kg、1歳で同 63cm、3.83kg、2歳で 76cm、6.99kg、3歳以上で 82cm、8.92kg に成長します（いずれも 1 月時の平均）。寿命は 7 歳前後です。尾叉長 60cm をこえる頃から成熟し、産卵期は 1~7 月にわたります。産卵場は東シナ海が中心ですが、太平洋側は伊豆諸島以西、日本海側は能登半島周辺以西の海域まで産卵が行われています。高知県周辺での産卵期は 4~5 月です。

資源動向

ブリの資源評価は日本海と太平洋を一括して行われています。全国漁獲量は増加傾向にあることなどから、平成 22 年度の資源評価では、水準は「中位」、動向は「増加」傾向にあるとされています。しかし、漁獲量の増加は主に山陰や房総・常磐のまき網による小型魚の漁獲量増加によるものです。定置網でも増加傾向は認められるものの、1950 年代以前の水準には達していません。

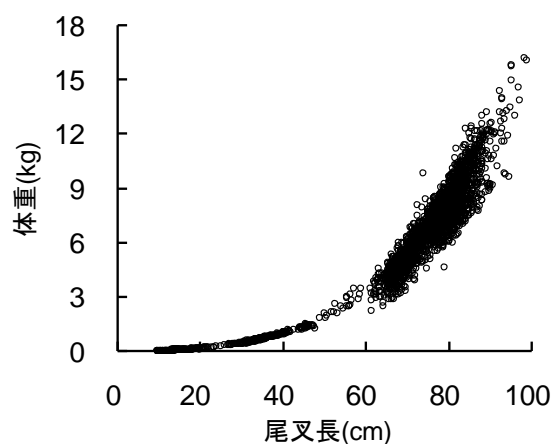


図 1 高知県産ブリの尾叉長と体重の関係（平成 18 年~23 年の測定に基づく）。

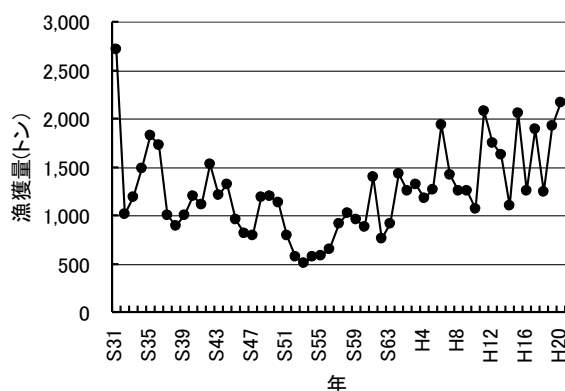


図 2 高知県下におけるぶり類漁獲量の推移。注：統計上、ヒラマサとカンパチも「ぶり類」に含まれるが、そのほとんどはブリと思われる。

県内の漁獲動向

本県におけるブリ漁獲量の約 8 割は定置網によります。他に、沖ノ島や柏島、足摺岬沖では、まき餌でブリを漁場に集めて釣り上げる、飼い付け釣りという漁法でも漁獲されます。

県内におけるブリ漁獲量は昭和 40 年代～昭和 50 年代には 1,000 トンを下回る水準で低迷していました。平成元年（1989 年）以降は増加傾向にあり、近年は 1,000～2,000 トンの水準で推移しています（図 2）。また、平成 21 年（2009 年）は足摺岬、平成 22 年（2010 年）と平成 23 年（2011 年）には室戸岬周辺の定置網でそれぞれ平年を大きく上回る好漁となりました。

定置網では、2～5 月が主な漁期です（図 3）。例年、漁期の始めには 10 キロをこえるような大型のブリが来遊します。その後、9 キロ級や 7～8 キロ級に漁獲の主体が移ります。5 月になると、4～5kg 級のメジロ銘柄がまとまって漁獲されます。5 月の下旬に水温が 20℃をこえるようになると、本県におけるブリの漁期は終わります。

高知県水産試験場では、アーカイバルタグという記録型標識をブリに装着し、全国各地から放流しています。アーカイバルタグには、ブリが泳いだ毎日の位置や、2 分ごとの遊泳水深・水温データが記録されます。放流後、ふたたび漁獲されたブリのタグデータを解析することにより、「ブリはいつ、どこを、どのように泳ぐのか？」が明らかになりつつあります。その結果、高知県にやってくるブリには、1) 遠州灘—四国南西岸回遊群、2) 根付き群、3) 豊後水道—薩南回遊群、4) 紀伊水道—薩南回遊群、の少なくとも 4 つの異なる回遊経路があることが分かりました（図 4）。図 4 をみると、すべての回遊経路が高知県沖で重なることがわかります。高知県沿岸は太平洋側における「ブリの交差点」のような海域であり、その地の利を生かして古くからブリ漁業が営まれてきたといえるでしょう。

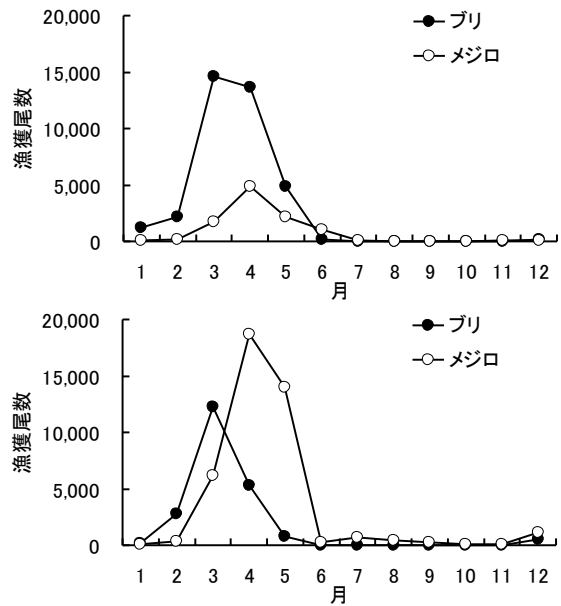


図 3 県西部（上段）と県東部（下段）の標本定置網によるブリの月別漁獲尾数。平成 11 年～平成 20 年の平均値を示す。ブリ銘柄は体重 6kg 級以上、メジロ銘柄は体重 3～5kg 級を示す。

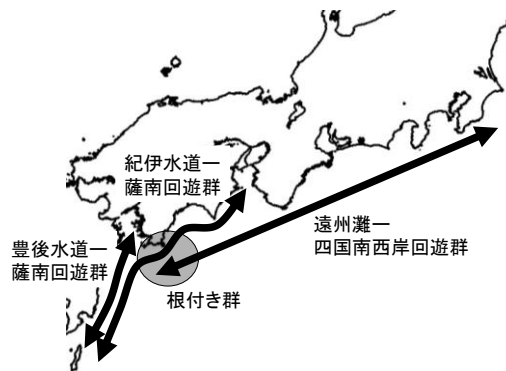


図 4 アーカイバルタグによる放流調査から明らかとなった太平洋側におけるブリの回遊経路。